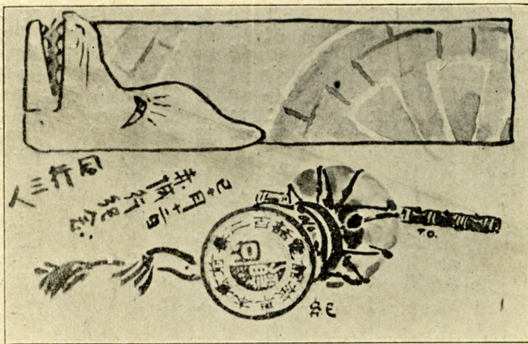


## 赤城の秋 (下戸日記)

同行三人

上毛赤城山上の景色は昨年来新詩社の人々の紹介によつて世に知られた。私は當時同行せられた克巳栢亭兩氏の御請で夏の美を聞くを得た



ふとは六つかしい。併し挿圖と比べて見たら幾分か赤城の様子も知れやうかと爰に登載するとした。(行巻)

晴。用意万端よろしくあつて、急いで目白坂の汀先生のお宅へ駆け付たのが午後の二時、それから草鞋がけの旅の仕度となつて停車場へ往たら、そこに欠呻をしながら待つてゐる人があつた。

十月十二日

華 秋

(汀)先月は兩國でさんく待たせた、併し今日の默念は、學校が濟むと俾宅へと急がせたが、着換に手間どりはならずと車上で洋服のボタンを不殘外したとは滑稽、そしてこゝで一時間餘も待つたとは猶……

三時五十分の汽車へ乗込んで赤羽で前橋行へ移つた。熊谷あたりから日が暮れて、東の窓には十五夜の月がまんまる、詰らぬ景色が急に趣のあるものと變つた。

(默)僕は豆、汀鶯は氷砂糖と山の上の食物を用意して來た。華秋は前橋で何か買ふといふ、『甘いものがよい』、『晒鮎を買つて汁粉を造らう』、『大賛成』、『餅を買つて往かう』、『硬くなるだろう』、『それならリスリンをつけて置け』とは華秋の洒落で、これは確かに傑作である。

七時半前橋へ着いた。眞闇な道を馬車の線路を傳はつてゆくと七八丁、此地第一といふ白井屋の敷居を跨いた、草鞋がけの仰々しい姿を見て『今日はどちらから』と眞面目にきくおかみさんに誰やら北海道からとは人がわるい。

(汀)『御疲れさま』と番頭の挨拶、しかしれつから御疲れ遊ばさぬので一寸返辭にまごつた。

我々にはちと過ぎた中々立派な宿である、『御風呂を』といふて女中の持つて来た袍衣は綿八丈の、裏には緋金巾一寸おつなものである。さて早速風呂へと参じたが其熱いことく。

(江)なんだ江戸兒の癖に、弱い音を吐き給ふな。

(黙)いやほんとに熱い、汀鶯の平氣でゐるのは不思議だ、きつと瘦我慢であらう。

(江)今時湯銭が二銭だといふ大久保の奥に住んでゐる人とは違ふよ。

湯から出て部屋を間違へ、二三室手前で障子に手をかけたが、通りかゝつた女中に教へられて無事に舞戻つた、跡から来た誰やらは、他處の座敷を大威張であけて『これは失禮』と頭を掻いたやうな。

(黙)たれ知るまじと思つたに女中め内通しらしい。

『姉さんこゝらに晒簞を賣つてゐますか、北海道産がよいが』と食事の時にきいたら、『へエ晒簞にもさんがつくのですか』とは大愛嬌。それから貸下駄突かけの、黒襟廣袖の袍衣に恭しく帽子を冠つて市中のそゞろあるき、早速角の乾物屋で目的物一袋を買つた、砂糖屋は二三軒先。

(江)こゝに珍談がある、砂糖屋の番頭晒簞の袋を見て『これは何處でお求めになりました、私共では五錢ですが大坂出来て臭いのです、東京製の大極上々はこれ一袋六錢』と出して見せたのは富士印。こゝきいては臭いものは持つて往けず今六錢で買つて来た計りのものを更に一錢つけてよいのと取

換へて貰つたが、わざ／＼五六軒持つて来て駄賃をとられたとは、思い切つて上出来のホンチではないか。

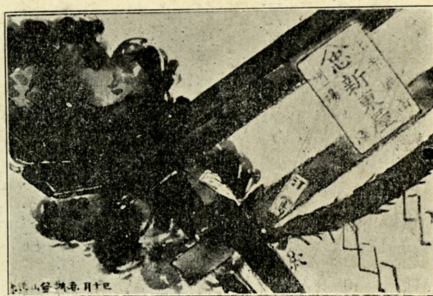
(黙)砂糖屋でも笑つてゐたが我々も随分可笑かつたれ。何とても冷かし給へ、旅の耻はかき捨といふと御存知ない人達だ。さて片原饅頭少々求

め、汁粉の種になる餅はないかと方々たづねたが、要領を得ぬ、不馴の故でもあらうか紙屋も天麩羅屋も餅屋と思はれ、はては蒲鉾の並んでゐるのさへ切餅に見えたが終に手に入らなかつた。

(江)默念は、スケッチブックをわざ／＼前橋で買つた。これも御苦勞さまだね。

(黙)いよく餅がないので誰やら蕎麥粉を買つてゆけといふた、汁粉の蕎麥搔はまだ食つたがない。

それから歸つて例の仕切判をベタ／＼、いろ／＼な趣向の繪葉書が澤山出来て、床に就たのは十二時過、今夜の夢は嘘かし山の中をかけ廻るとであらう。



好天氣々々、宿を出たのは八時過、途中でもろこしの粉を買つて小暮へと向つた。赤城の山はコバルトにライトレッドを混ぜたやうな色をして目の前に横はつてゐる。左は榛名、遠くは淺間、少し離れて妙義の山も見える。前橋から二里、十時前に小暮へ着いて休所で一ぶく。オット誰れも煙草を喫まなかつた。鳥居を潜つて、夫から三里人家なしといふ小松原、照りつけて耐らぬ。暑い處へ冬服で、其上外套と寫生箱を擔いてゐるので中々の重荷、こゝの三里は實際飽々した。

(汀)途中の草原には梅鉢艸、龍膽、松蟲草おくれ咲の石竹、薔など咲き亂れてゐて中々美しい。小暮あたりは木も草も眞青であつたが、追々進むに連れて黄に赤に漸く秋らしくなつて來た。

(華)女中への手前といふ譯ではないが、今朝飯を少し遠慮したためか元氣がなく疲れが甚しい、それを忘れるために語呂合せても思つていろ／＼やつて見た、そのうち六根清淨といふ題で、こん献上、鐵幹明星などよい方で明星はこの山にも關係淺からずである。

箕輪へあと半里といふ處に牧場の柵があつて、一寸工風を凝した門がある。上りといふ程の傾斜でもないが、後ろを見ると上毛の大原野は眼下に視える。左右の山々は燃ゆる斗りに紅くなつてゐる。放し飼の馬や牛がそこ、こゝに一團となつて草を喰つてゐる。まるで外國の繪を見るやうだ。

(汀)華秋は元氣消沈、箕輪の人家が直ぐ眼の先に見ゆるのに、そこ迄の勇氣もなく終に辨當を出し始めた。一體旅行は先頭に立てば疲勞が少ないので、居もしない蛇を怖がるも非常で何といふても進めない、前世は定めて蛙でもあつたらう。(華)握飯二つで元氣が回復した、ア、生れて始めてこのやうな旨い辨當を食つた。

川を渡つて少し登ると箕輪の家が二つ三つ、馬が仔を連れて道端に遊んでゐる。休息所へ入つたが實に大變な牀蓑、床には荒薦を敷いた斗り、古い家ではないが壁は凍るからとて隙間だらけの羽目板、こゝで冬を過すとは驚いたものだ。妻君は何と思つたか我々を見て袖のある着物と着替へた。

(華)こゝで井飯の湯漬を二杯。今日の日記を書いてゐるお方は腰の握飯のほかに三杯と詰込んで、其上まだ欲しそつてあつたものだから、傍に酒を飲んでゐた山の入足が「私の辨當を用意に一つ差上ませうかといふた。

(汀)華秋が鱗のおかずを手をつけられて、角のとれた御茶受の金米糖で飯を食ふてゐたのはよほど妙であつた。

默念にはまだ面白い話がある。辨當の寄附を申出た入足は大洞の宿屋の風呂焚で、此夏さる華族さんが來て寫生をした毎日僅かの時間よりは筆をとらぬ、それは光線の加減であるとかいふやうな寫生畫の初歩を、此人足から事も細かに説明されて、そんな事百も承知と云はれれもせず大に持餘してゐたのは頗る可笑かつた。それから話を外らす積りかなんかで、



朝式氣々々、馬を乗せ、山を登り、道中でもこの粉を買つて小暮へと進んだ。赤城の山はコバルトにライイトレッドを混ぜたやうな色をして目の前に横はつてゐる。左は標名、遠くは淺間、少し離れて妙義の山も見える。前橋から二里、十時前に小暮へ着いて休所て一ぶく。(オット誰れも煙草を喫まなかつた) 鳥居を潜つて、夫から三里人家なしといふ小松原、照りつけて耐らぬ。曇い處へ冬服で、其上外套と寫生箱を擔いてゐるので中々の重荷、この三里は實際飽々した。

(江)途中の草原には梅鉢神、龍圖、松島草おくれ咲の石竹、蕨など咲き亂れてゐて中々美しい。小暮あたりは木も草も眞青であつたが、道も進むに連れて黄に赤に漸く秋らしくなつて來た。

(華)女中への手前といふ譯ではないが、今朝飯を少し遠慮し、少しめか元氣がなく腹が甚しい、それを忘れるために語呂合せでもと思つてゐる、やつて見た、そのうち六根、清淨といふ題で、一寸、献上、鐵骨明星などよい方で明星はこの山にも關係淺からずである。

箕輪へあと半里といふ處に牧場の櫓があつて、一寸工風を凝した門がある。上りといふ程の傾斜でもないが、後ろを見ると上毛の大原野は眼下に視える。左右の山々は燃ゆる斗りに紅くなつてゐる。放し飼の馬や牛がそこそこ一團となつて草を喰つてゐる。まるで外國の繪を見るやうだ。

そこ迄の勇氣もなく終に辨當を出し始めた。一、辨當は、何といふても進めない、前世は定めて註で、もあつたらう。(華)握飯二つで元氣が回復した、ア、生れて始めてこのやうな旨い辨當を食つた。

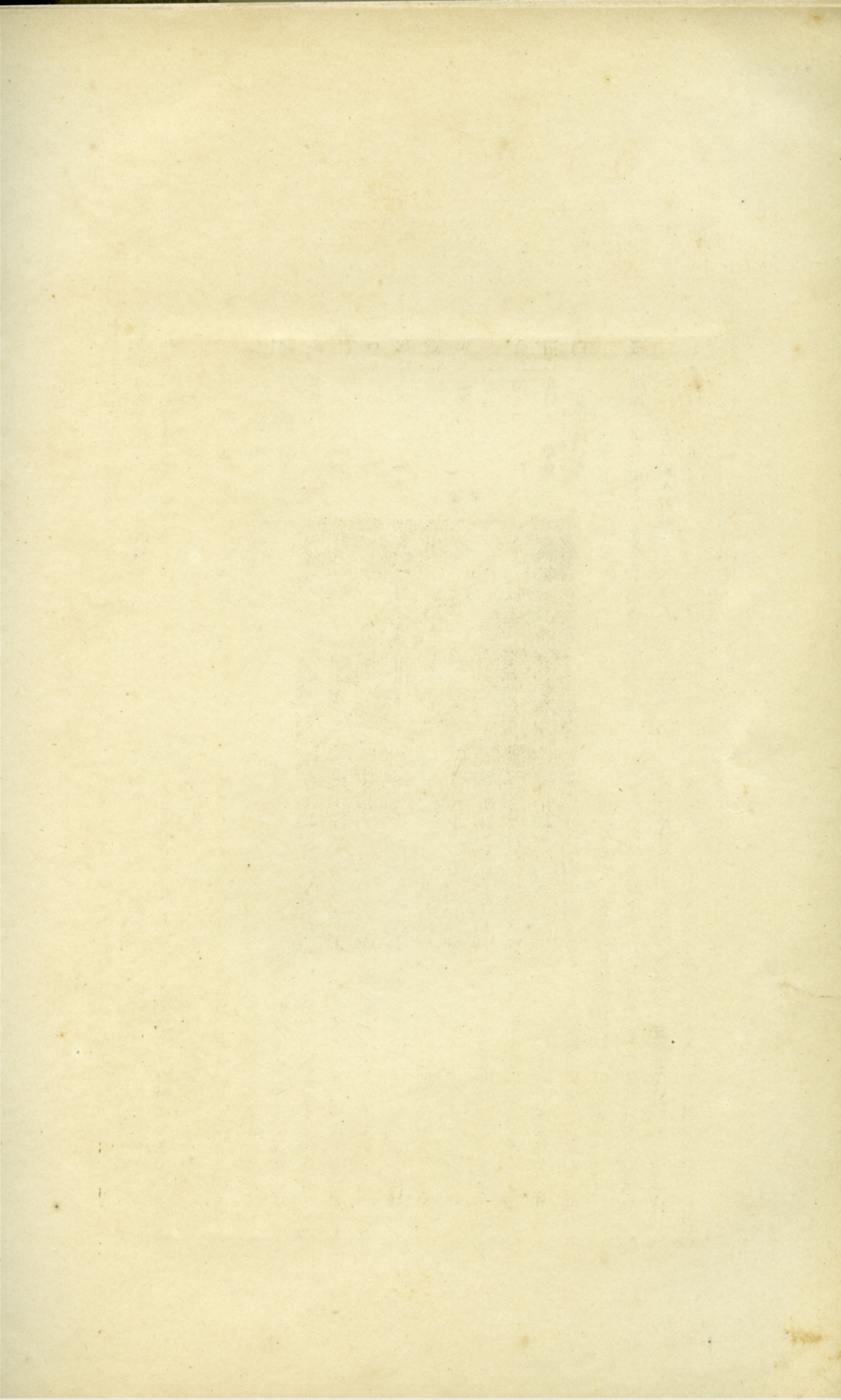
川を渡つて少し登ると箕輪で家が二つ三つ、馬が仔を連れて道端に遊んでゐる。休息所へ入つたが實に大變な牀、床には荒薦を敷いた斗り、古い家ではないが壁は凍るからとて隙間だらけの羽目板、こゝで冬を過すとは驚いたものだ。妻君は何と思つたか我々を見て袖のある着物と着替へた。

(華)こゝで井飯の湯漬を二杯。今日の日記を書いてゐるお方は腰の握飯のほか三杯と詰込んで、其上まだ欲しそつたものだから、傍に酒を飲んでゐた山の入足が、「私の辨當を用意に一つ差上ませうかといふた。

(江)華秋が餅のおかずを手をつけられて、角のとれた御茶受の金米糖で飯を食ふてゐたのはよほど妙であつた。

默念にはまだ面白い話がある。辨當の寄附を申出た入足は大洞の宿屋の風呂焚で、此夏さる華族さんが來て寫生をした、毎日僅かの時間よりは筆をとらぬ、それは光線の加減であるとかいふやうな寫生畫の初歩を、此人足から事も細かに説明されて、そんな事百も承知と云はれれもせず大に持餘してゐたのは頗る可笑かつた。それから話を外らす積りかなんか、



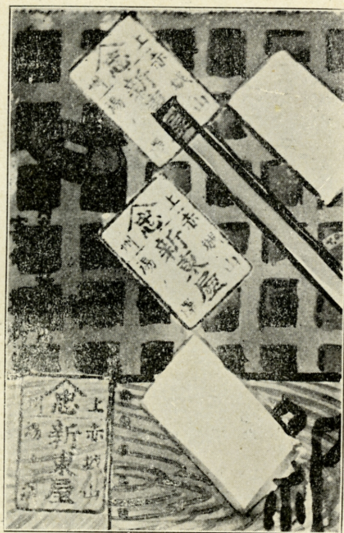


此牧場には何頭位放してあるときいたら、二百頭も居るとの  
答、それで牛と馬と何方が多いかときき積りて『どっちが旨  
い』とやつたので、兎角食ふ方に心がとられてゐるからだと  
昔々大笑をした。

まア何とでも云ふべし、誰も嘘だとはいはぬから。さて時計は  
二時、これから大洞迄山道二里で、少しは急だとの話にスケッ  
チもとらずに出發した。途中の景  
包は實によい。少しは葉の落ちた  
のもあるが。染たとしてこっはゆく  
まいと思はるゝやうに美しいのが  
ある。道は息の切れる程の上りて  
はなない、僕の健脚は少しも疲れを  
覚えぬ、三人の中で一番威らから  
う。

(汀)再び語呂合が始まつた、曰  
く戀の重荷を肩にかくと、華秋  
直ちに應じて曰く、脚の強いを  
鼻にかけと。

崩れた坂を一奮發で高原へ出た。何といふ大きな景色であらう。  
右には地蔵山なだらかに、左は鈴ヶ峰屹として聳え、前は遠く  
利根上流の諸山を望むべく、廣大壯麗、僕はまだ出逢つたこと  
ない立派さに、草の中へ腰を下して夕風の寒いのも忘れて見惚  
れて仕舞つた。



(汀)實に日光の奥湯本あたりの景色に似て、それよりも猶大  
なるものである。

(華)好いにはよいが、この上水うへを一杯飲ましてくれるともつ  
とよいのに。

高原を横斷すると數丁、それより道は下りになる。間もなく紅  
葉した木の隙に水が見える。沼に添ふて十數町、苔に古びた赤

城の社があつて、其傍に猪ヶ谷と  
いふ宿屋がある。先客追立二階の  
八疊を占領して爰でも紅裏つきの  
袍衣を借り、今新規に代へた斗り  
の鑄泉へ入つた、ア、愉快々々。

(汀)湖畔には家は只二軒あるの  
み、一は青木といふて西の方水  
の落口の邊にある、猪ヶ谷は神  
官を兼ねてゐて氷の研出もや  
り、主人は滿韓經營に奔走中と  
の事、山中の宿として設備が整

つてゐるが、便所に草履がないのは少々閉口。  
したゝかに夕飯を食つて、夫からまた仕切判やら神主の判、遂  
には御守札の判迄捺して貰つて繪葉書を拵へた。今日七里の  
道を歩行たが格別足も痛まぬ、赤城の山は道こそ遠いが極めて  
樂なものだ。

(華)かゝる山中にも一日おきに郵便は來るとの事、冬は箕輪



迄持つてゆくので、そこへは矢張隔日に來るといふ話。

この月四日に薄氷が張つたといふ丈あつて可なり寒い、此夏の百花園では暑いといふと罰金であつたが、今度は寒いを罰金にするにした。

(汀)床へ這入つてから宿の姉さんに、『もう一枚かけておくれ朝寒いといけないから』といふて皮切をやつた、大失策。默念が喜ぶから猶更忌々しい。

#### 十四日

汀 登

六千餘尺の山の中にも鶏がゐて我等の心地よき眠りを覺ました。床の中で真先に默念が寒いをやつた。これで少しは溜飲が下つた、それよりも嬉しいのは今朝の天氣で、晴々しい朝日が障子に輝いてゐる。氷のやうな水で顔を洗つて朝飯もそこ／＼寫生に出掛けた。何處を見ても皆繪になる。沼に沿ひ黒檜山の麓を廻つて辨天嶋へ入つて見た。嶋は朽木を涉つてゆくのである、昔しから船を浮べぬ定めであるとのとだから、水の多い時は入るとが出來ぬであらう。中は雜林枝を交へてゐて元より道も何もない、東の岸へ出て見ると、前には駒ヶ嶽が湖を壓してゐる。紅葉は少し晩れて頂きはたゞ幹ばかり灰色に残つてゐる。裾の方は楓、白樺、水檜など皆よい調子に色づいてゐる。山は後ろに日を負ふて眞暗で、沼の水は底も知れぬ深緑の色をして山の影を映してゐる。何といふ壯大な景色であらう。我輩は此處に陣取つて寫生するに極めた。あとの二人は嶋を去つた。

(默)そんな處はよく素人のやりたがるものさ。我等はもつと

よい處へゆくのみ。後で一人て淋しがつてもいけない。森の奥から何か出て來そうだよ。

少々寂寞を感じざるにもあらずであつたが我慢して寫生を始めた。やがて沼の向ふて話聲がするから、振返つて見たら二人は遙かの木の蔭に三脚を据へた様子、こちらは日向の心地よい處であつたから、『コッチは暖かいぞ』といふてやつたら、默念は山も裂けよとの大聲で『寒くはないぞ』と怒鳴り返した。メたぞ。

(默)吁！ やられた、實は日蔭で慄へてゐたので、暖かいと云はれて忌々しく、何の考もなくやつつけたがさて残念なことをした。

(華)今のは大ぶ大々かつたから罰金は二三倍願ひますよ。夫から三四時といふものは一心不亂、筆は只面白く進むに今は淋しいも恐ろしいもない、漸く趣を提えてきて二人の傍へ來て見れば、成程素人らしからぬ處を寫してゐたが、風で山の影が水によく映らぬとか、空の色が異つて來たとか、御自分の腕は棚へ上げて頻りに苦情をいふてゐた。

(默)やつぱり汀鶯のやつた處がよかつたようだ。

さて辨當々と華秋と共に風呂敷を解いたが、默念は早や一時間も前に濟ませたとの、言譯に曰く『今朝腹工合がわるくてたつた三四杯で濟ませたから夫故御先に』と、それもよいが宿屋の姉さんの心添、茄子の糟漬三人分を一人てせしめたのには驚いた。

(黙) いや全く知らなかつたのだ、僕に此色を持たせたのがよくない、つい旨かつたものだからさ失敬々々。

(華) お仲さんに云ふて又貰ふよりほか致方なし、ア、少々残念ではある。

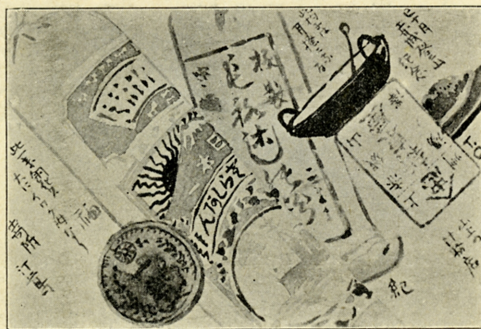
夫から沼を左に見て一週した。楢の美事に彩られてゐる林の中を、落葉踏みつゝゆく事二十丁程で水の落口があり小さな橋がかまつてゐる。傍には青木といふ宿屋が一軒、そこから上へ道をとつて昨日の高原へ出て。こゝに鈴ヶ峯を寫した。日は西に、山の頂のみ僅に光を見せてゐる。陸の黒きに草原の黄なる、其間に白樺の幹の灰色に輝ける、配合極めて雄大である。

(華) 繪は眞黒になつて仕舞つたが實によい研究をしました。

夕方宿へ歸つた。折しも山で笹熊が捕れたとのとて今夜の膳に上つた、一寸臭みはあるが不味くはない、何と思つたか黙念はあまり結構そうな顔をせぬ。

(華) 四足を開いて料理されてゐる處を見たから、それなくば……………

飯が濟むが否やいよく汁粉屋の開業、鍋を貸せ、七輪だ、湯だ、水だ、井、杓子、お椀に箸とそれはく大騒ぎで、越後生



れのお仲さんは二階を下りたり上つたり。

(黙) 華秋は頼りに晒船を掻廻してゐる。汀鷺は大井を抱へて箸でもろこしを練つてゐる。僕は記念のスケッチを命ぜられて鉛筆をとつたが、あまりのおかしさに筆は一向進まない。

おつと華秋君旨いかれ、僕にも一寸お加減を見させてくれ給へ。

(華) いまに澤山あげますから、意地の穢いものを申さずさつさと描いたり〜。

晒船半袋、白砂糖百目、もろこし一合、どうやら御汁粉なるものが出来たが、さて箸をとつて見たら吭を鳴して待遠しがつた甲斐もなく、あまり甘過ぎてたつた一杯でげんなり。御馳走によんだお仲さんも二杯目には少々持餘しの氣味であつた。

(華) 上戸が一人居たらとても出来ぬ仕事だ残りば明晩のお樂しみと鍋の儘床の間に安置して、此夜は晝の疲れに給葉書も出来ず、早くから臥床の中へもぐり込んだ。

十五日

華 秋

いやに冷える朝だ、露骨にいへば罰金だが今朝も床の中でやつた人がある。

(黙) 僕だよ、きこえたかなア

空は曇つてゐる、物を乾すべく借りた櫓に布團を載せて巨燧を

作つた、是も束の間、忽ち握飯に急ぎ立てられてはや寫生箱は肩へ上つた。

今日は小沼へゆく筈で、店頭で草鞋を穿いてゐるときおかみさんが出て来ていろいろ話をした、そのうち又禁句が出た。

(汀)うるさいな、十遍なら割引との約束だ、面倒臭いア、寒

さて、片意地などではある。昨日笹熊を捕つた獵師兼水小屋の番人と、獵犬モクなるものを案内として前の丘を上つた。八丁程で血の池といふのがある、夫を過ると小沼で、四方が漠としてゐてれつから凄くも淋しくもない。

(汀)小沼へ往たらチウシノガランを見てゆけと宿のおかみさんが云ふた、小沼の瀧の落口が岩が逼つて銚子の口のやうだ、との話だからその事をいふのであらう。沼から二十丁もあるといふので往て見る勇氣がなかつた。

空はどんよりと曇つて、黒檜山は霧に包まれ、冷い風がやゝ烈しく吹いてゐる、至て慎み深いそれがしも終に二度迄罰金の種を作つた。

(黙)あまり何なので枯木を集めて焚火をやつた、薪は近處に澤山あるから太い奴を井樓に積んでどん／＼燃した。

兎に角三脚を据へて白樺を中心に寫生をはじめたが、繪をかくよりも火の傍に居る方が多くさつぱり排取らぬ。

(汀)吾輩はこゝを濟ませて血の池の上に宿換、そこでも焚火をしたが、風の吹廻して繪具は眞白な灰だらけ、少なからず

閉口した。

午後の二時と覺しきころ雨がぼつ／＼やつて來た、見込がないので店を仕舞い、宿へ大急ぎ、さて是からが例のおたのしみ。

(黙)又ぞろ餡を増す、湯を入れる、砂糖を貰つてくる、昨夜に劣らぬ大騒ぎ。

(汀)待違しがつて煮立たぬうちにもろこしを入れたから堪らない、中で融けてどろ／＼な妙なものが出來た。

(黙)牧場に雨洒しになつてゐる牛の何かのやうだれ。

雨は烈しく霧は濃く、目前二三十間先の沼も見えぬ。窓を開けると室内の燈火で自分の影が大きく霧にうつる、何だか怖いやうである。昨日天氣になあれと心に祈りつゝこの夜も早くから臥床に入つた。

## 十六日

歌 念

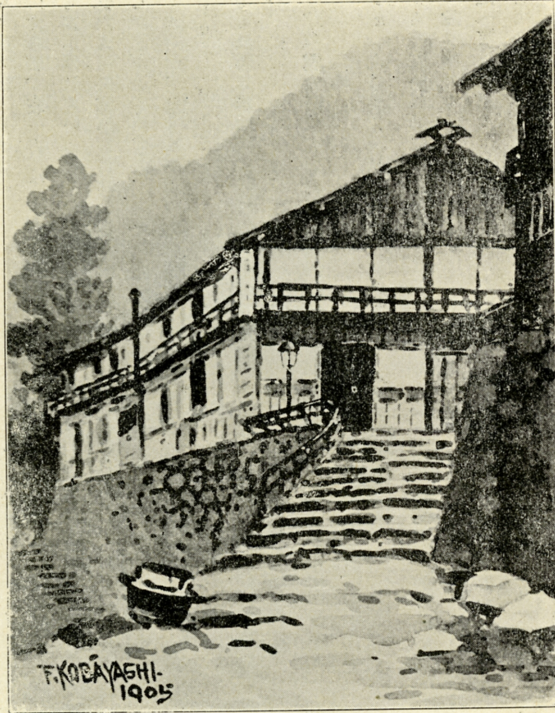
雨はやんだやうだが霧は少しも晴れない。今日は湯の澤へ下る筈であるが此霧では殆ど先が見えぬ、誠に心細いのである。さて汀驚の週旋で昨日の獵師を案内者に頼み、銘々の荷物を負はせて八時頃出發した。

(汀)出發に際し黙念と華秋は頗る罪なをやつた。吾輩はお仲さんの爲にこゝに素つば援をやらう。それは例のお汁粉で、昨夜の残りがまだ椀に二杯程あつた、勘定をする時お仲さんに残して置くといふて喜ばしたのに不拘、こそ／＼と二人で相談してやがて鍋を火鉢にかけ一ゼんの箸を一本宛持つて茶飲茶椀ですゝり始めた、最初は少し残すといふてゐたが、終

には湯を入れて搔廻す始末、實に呆れたものだが、それよりもこゝろしながら鍋の蓋をとつて失望するお仲さんの顔が見たいものだ。

(華)その上今夜の樂しみにと、残りの晒飽ももろこしも砂糖迄もボケツトへ押込んで仕舞つたのは、我ながら餘りに未練が多過た。

霧は深いがそれでも時々薄れゆきて何とも云へぬよい景色である。小沼の落口を向ふへ渡つて山の上の一筋道を辿つたが、これは躑躅ヶ峯といふて中々の難處である。雨揚句の急な下り坂、馬の背といふは決して形容てはな



湯の澤新東屋

(華)多少どころか大々困難である、きけば他に馬の通る道もあるとか、このやうな處へ引廻す案内者の面憎さ、と思つた同時に先に立つてゆく案内が美事なつて尻餅を突いた、此利

那實に何とも云へぬ愉快な氣がして思はず萬歳を高く叫んでやつた。

(汀)案内者は大不平今に聲をとつてやるとつぶやいてゐた。

萬歳の聲に何かと、殿しんがりに立つてゐた僕はつと前を見た拍子に足が御留守になつてツルツと亡つて手を突いたが、岩の角にでも當つたか甚く腫出して大閉口。

(案内者曰く)その位いのとはあんべいよ。

岩と岩と相重つて僅に通するスネスリ(婦人ならば名が違ふそ  
うな)とよばるゝ難處も過ぎ、大洞より一里で大山毛櫛オ、メナといふに着いた。

(華)家でもあつて茶でも飲めるかと思つたら、只十抱程の山

毛櫛の太木があるばかり。

暫時息を入れて又も峯傳ひに一本道を辿つた。霧はまだ晴れぬが左の方は一體に牧場て所々馬の群も見える。

半里斗り來たら道が二つに分れた、右の方には瀧の音がきこえるに案内者は同じ道だから左へ往けといふ。

(汀)案内者は先年巡査五六人の先導をした時、巡査がいかな難處も平氣だ、自慢をしたといふてわざと途のない處へ引張廻し困らしてやつたとの話、此老爺中々人のわるい奴だ。

進むと十町あまり、案内者は連りに右への下り口を捜してゐる、先きの道であらうといふても只否と答へて、終には巡査ではないが途も何もない雜木林や、丈けにもあまる草叢の中を引摺廻され、上つたり下つたり、草の露と汗とで全身づぶぬれになつて仕舞つた。

(華)萬歳の仇討でもあるまいが、返す／＼も憎らしい老爺だ。どうも先の道に相違ないから、案内に楯はず引返して見たら果してそれで、忽ち不動堂の前へ出た。

(汀)強情な老爺は先の道へ戻るを忌ま／＼がつて、重い荷を負いながら猶も崖を上下してゐたが、終に我を折つて吾々の跡をついて來た。

そこには大きな杉が二三本あつて、門を入ると見上る斗の眞直な大巖窟の中に古い堂があり、若い坊主が机の前にたゞ一人番をしてゐる。あたりは苔むして濕つぽく。青々として何となく

鬼氣の逼るやうな心地がした。

(華)押かぶさつた巖と堂の家根との眞闇な間に手拭を冠つた人間が居る、極めて無氣味に思はれた、多分御籠りの人であらうと思つたら、夫は家根を直す職人であつた。

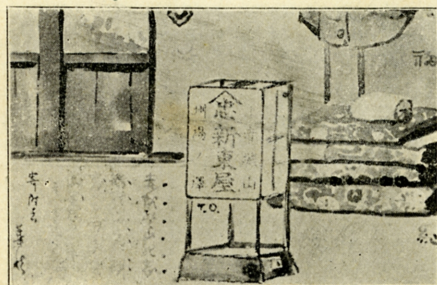
こゝから不動の瀧迄は七八丁といふが其實三丁ばかり瀧は高さ十六丈餘、優美な形をしてゐる。前の大岩の上には石の不動尊が立つてゐる。紅葉は今が三分、盛りにはまだ間があるらしい。一寸スケツチして元へ戻り、大通龍神社の御祀所兼休息所て豆腐汁の中食をやつた。

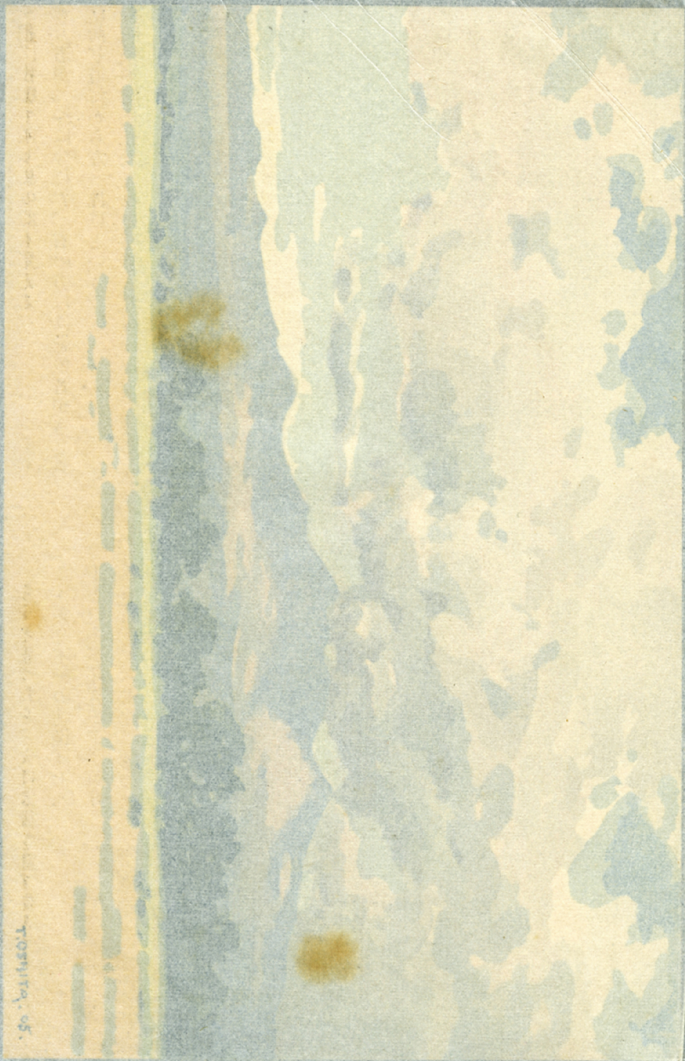
(華)燗爐裏の中に入つて濕れた脚絆を乾しながら箸をとつたが中々風流なものであつた、併し天井から下つてゐるランプブラツクの

煤が落ちて來はせぬかといさゝか心許なく思つた。

(汀)煤は落ちなかつたが、ひたしものゝ中に鼠の糞が一つあつた。

湯の澤迄は十町、大通龍神社の奥の院迄四丁は眞の胸突で、足





(華) 茶でもあつて茶でも飲めるかと思つたら、只十抱程の山毛樺の大木があるばかり。

暫時息を入れて又も峯傳ひに一本道を辿つた。霧はまだ晴れぬが左の方は一體に牧場で所々馬の群も見える。

半里斗り來たら道が二つに分れた、右の方には誰の音がきこえるに案内者は同じ道だから左へ抜けといふ。

(汀) 案内者は先年巡查五六人の先導をした時、巡查がいかな難處も平氣だ、自慢をしたといふてわざと途のない處へ引張

廻し困らしてやつたとの話、社老露中と人のわるい奴だ。

進むと十町あまり、案内者は聲りに右への下り口を捜してゐる、先きの道であらうといふても只否と答へて、終には巡查ではないが途も何もない雜木林や、丈けにもあまる草叢の中を引摺廻され、上つたり下つたり、草の露と汗とで全身づぶぬれになつて仕舞つた。

(華) 萬歳の仇討でもあるまいが、返すくも憎らしい老爺だ。どうも先の道に相違ないから、案内に標はず引返して見たら果してそれで、忽ち不動堂の前へ出た。

(汀) 強情な老爺は先の道へ戻るを忌まうがつて、重い荷を負いながら猶も崖を上下してゐたが、終に我を折つて吾々の跡をついて來た。

そこには大きな杉が二三本あつて、門を入ると見上る斗の眞直な大巖窟の中に古い堂があり、若い坊主が机の前にたゞ一人番をしてゐる。あたりは苔むして濕つぽく、青ととして何となく

鬼氣の盛るやうな心地がした。

(華) 押かぶさつた巖と堂の家根との眞間な間に、人間が居る、極めて無氣味に思はれた、多分御籠りの人であらうと思つたら、夫は家根を直す職人であつた。

こゝから不動の流迄は七八丁といふが其實三丁ばかり

漕は高さ十六丈餘、優美な形をしてゐる。前の大岩の上には石の不動尊が立つて

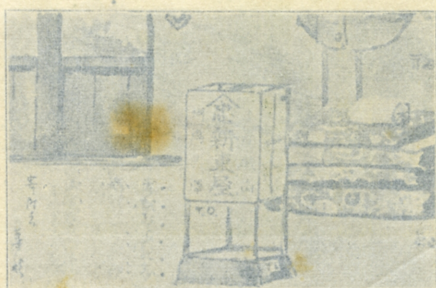
ゐる。紅葉は今が三分、盛りにはまだ間があるらしい。一寸スケッチして元へ戻り、大通龍神社の御記所兼休息所で豆腐汁の中食をやつた。

(華) 燗裏の中に入つて濕れた脚絆を乾しながら箸をとつたが中々風流なものであつた、併し天井から下つてゐるランブプラツクの

煤が落ちて來はせぬかといさゝか心許なく思つた。

(汀) 煤は落ちなかつたが、ひたしものゝ中に鼠の糞が一つあつた。

湯の澤迄は十町、大通龍神社の奥の院迄四丁は眞の胸突で、足





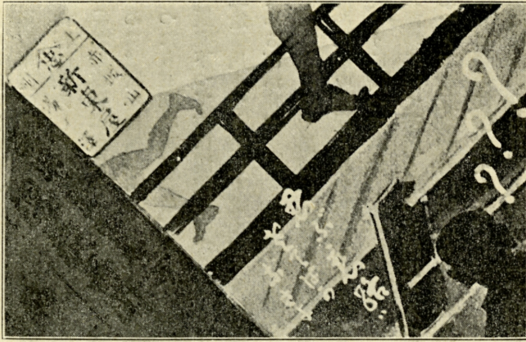
TOSHITA. 05.





場の木の根は三尺以上も高いのがあつて大苦しみである。

(汀)昔物語にある赤城の天狗といふのはこゝに住んでゐたのであらう。



上り切ると間もなく

下りて、湯の澤の煙も見える。湯の宿は僅かに四軒、我等は新東屋といふのに草鞋を脱いた。

さて奥まつた二階の部屋へ通されて袍衣に着かへ、霧で寫生が出来ぬから仕切判の繪ハガキ製造をやつた。

(汀)新詩社の人々もこゝに一泊されたそうて、古い宿帳にはなつかしい友の名が誌されて

あつた。

そのうちに新に酌み込んだ湯も沸いた、炭酸鑛泉で濯のやうに落ちてぬて人肌位ひの温かさがある。夕飯は鮎と片葉茸の御汁

に、眞黒な玉子焼、その傍に添へてあつた磨生(す)を玉子と間違へて煩張つた華秋の様子は中々見物(みもの)であつた。

(華)山の中の玉子焼はこんな味がするのかと最初は一寸驚いた。

繪葉書に耽つて時を覺えなかつたが十一時頃で、もあつたらう、便所へ往た華秋が顔の色を變へて『危険』と云ひながら歸つて来た。

(華)ほんとに驚きました、今下から階子を上つた來ると、灯が暗いのでよくは分らなかつたが、印半纏を着た二人の男が非常に狼狽して椽側から逃出し、一人は垣を越えて隣りの家へ、一人は欄干を飛越して向ふの崖へ匿れた、何ても泥棒に相違なし、あゝ危険々々

それは一大事、山中でも油断はならぬと、不取敢隣室の客に注意する、もう寢て仕舞つた番頭を招んで警戒した。處が番公暫時首を傾げてゐたが、『ハ、ア分りました、それは此先に居る石切の職人共で、女の泊り客の處へ這込だのです、御心配には及びません』と、さてはそうかと少しは安心したが、何となく無氣味に思はれた、それにしても華秋はとんだ罪つくりをやつたものだ。

(汀)華秋はよほど怖しかつたものと見えて、寢る時は入口の襖に三脚や傘で心張をする、其上今夜はこゝへ寢かして下さいと、三人の真中の床へ入つた。可愛らしい坊やではないか。

十七日

汀 登

何事もなくて夜は明けた。窓を開けば山の上には二十日程の有  
明月が研出されたやうに照らしてゐて、頂上にもまだ日はさ  
ぬ。曉の風冷やかに何とも云へぬよい心地である。澤に下りて清  
き流れに顔を洗ひ、さて仕度もそこへ草鞋をかへて出發した。

(華)昨夜の曲者は夜中再擧を圖つて美事跳付られたそうな、  
女客は恐ろしがつて今日出發との話である。

(默)此事件が氣にかゝるかして、華秋は今朝よほど盆鎗して  
ゐた。宿を出てから一丁も往て急に引返したから、何かと思  
つたら三脚を忘れたのであつた。

一里程下つて右に溪流をわたり、二十丁程で赤城社の前へ出た。  
此邊は見るべき景色もなく、たゞ野菊梅鉢草などが美しく咲い  
てゐるばかり。

(默)前にゆく馬方に『薬は入らぬか』と華秋がきいたら、吾々  
を眞個の薬屋と思つたか『ナニ入りません』と眞面目に氣の毒  
そうに斷つてゐた。

大胡の手前て茶店と思つて酒屋へ入つた、『宅では茶はありませ  
ん』と景氣な若者に斷はられ、『おちやけ斗りですか』と口を  
滑らせたのは默念である。

大胡は折から市日でもあるか一寸賑やかであつた。上泉で晝休  
み、こゝで辨當を開いたが、湯の澤の番公氣を利した積りて、  
むすびの中へ佃煮を握り込んだため生臭くつて口へ入れられぬ  
詮方なしに少し餡の味の變つた團子を買つて晝を濟ませた。

汽車の時間に間のあるため三住で赤城と榛名のスケッチをやつ

た。街道筋で見物も多く中々うるさい。

(默)僕の繪は山火事の如く、華秋の空は夕陽になつた。汀鷺  
は二枚かくといふて膝の上で水貼をやつてゐたが、是も恐ら  
く出来損いてあらう。

前橋四時發の汽車に乗つた。吾等の踏破した赤城山は、夕暮の  
色に籠められて漸く臆になつてゆく。鮮に見ゆるは西の空なる  
霄の明星、深谷あたりで日は全く暮れた。

(華)大宮でいろ／＼御馳走を買つた。それは寒い罰金を出  
し合つたので、汀鷺先生大枚三十錢は近頃珍らしいとであ  
る。

華秋とは赤羽に、默念とは目白で別れて、家へ歸つたのが夜の  
九時、こゝに目出度赤城の旅行を終つたのである。

(完)

\* \* \* \* \*

○赤城駒ヶ嶽の紅葉の石版は製版困難で硬くなつたのは遺憾で  
ある

○小沼の岸は稍趣きを得た

○赤城山遠望は次項スケッチの説明にある通り多少原圖と相違  
の點がある